

# 北海道遠別農業高等学校

課程 全日制  
学科 生産科学科  
生徒数 73名

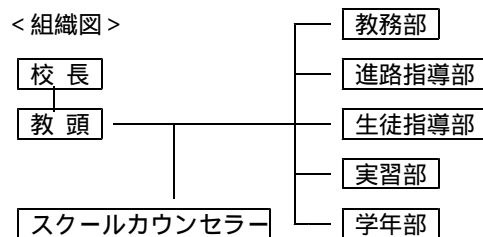
## 1 取組の特徴

- 1 学校環境適応調査「アセス」や子ども理解支援ツール「ほっと」の調査結果をアセスメントし、予防的教育相談を行う。
- 2 アンテナショップ「遠農高マルシェ」や異年齢交流の教育活動を通じたコミュニケーションスキルを活かす機会を提供する。
- 3 スクールカウンセラーによる構成的グループエンカウンター研修会を実施する。

## 2 取組のねらい

- 1 生徒のコミュニケーションスキルを高めることで、自己有用感を高め、良好な人間関係や学級集団の構築を目指す。
- 2 教職員の研修を行い、生徒理解を深め、組織的に支援する体制を強化する。

<組織図>



## 3 取組の経過

- |   |  |
|---|--|
| 5月 教育相談実施（1学年）<br>遠農高マルシェ・販売会（2・3学年）<br>（5～12月にかけて定期的に実施）   | 10月 スクールカウンセラー個別カウンセリング実施  |
| 6月 ヒラメ底建て網オーナー販売会（3学年）<br>小学生との交流学習（2・3学年）<br>（とうもろこし・枝豆播種、田植え）<br>こども園との交流（花壇造成）                         | 10月 食彩フェア・販売会（1学年）   |
| 7月 学校環境適応調査No.1「アセス」実施  | 11月 人権擁護委員によるデートDV講座（3学年）<br>ロールプレイ<br>スクールカウンセラーによる教員研修<br>（SGE）及びスクールカウンセラー個別カウンセリング実施 |
| 8月 遠別農業まつり・販売会（2学年）   | 12月 LHRグループワーク「パラダイムの転化」   |
| 9月 教育相談実施<br>スクールカウンセラー講演会及びスクールカウンセラー個別カウンセリング実施<br>小学生との交流学習（2・3学年）<br>（とうもろこし収穫、稲刈り）<br>こども園との交流（枝豆収穫） | 1月 学校環境適応調査「アセス」No.2実施<br>子ども理解支援ツール「ほっと」実施  |
|   | 2月 デートDV講座（1・2学年）<br>教員研修「ほっとの結果～課題の明確化と今後の取組について」                                       |

## 4 取組の内容

### 1 教育相談の実施

- (1) ねらい 学校環境適応調査「アセス」の分析によって生徒の状況を把握し、予防的教育相談を行う。
- (2) 対象 「アセス」調査結果において、満足度の低い生徒（38名）
- (3) 内容 教職員による教育相談の実施
- (4) 成果 支援を必要とする生徒の理解を深め、早期段階で対応することができた。

## 4 取組の内容

### 2 スクールカウンセラーによる講演会「ストレスマネジメント」

- (1) ねらい 人間が生きていく上でストレスは避けられないものであり、ストレスに適応することで成長できる側面がある。しかし、過剰なストレスが長く続くと心身に負担がかかり、様々なトラブルを招く。自分にストレスがかかった時にどんな反応が起きるか、何が自分のストレス源になっているかを知り、自分に適したリラクゼーションする方法（リラクゼーション）を知り、早めに行うことが大切であることを学ぶ。
- (2) 対象 全学年
- (3) 内容 ストレスによる反応や病気、ストレス源は個人によって違うこと、リラクゼーションの方法（呼吸法の体験）
- (4) 成果 ストレスによる心身への負担について学ぶことができ、自分のストレス源や自分に適したリラクゼーションについて考える機会となり、学校生活においても活用できる呼吸法について学ぶことができた。

### 3 異世代交流学習・販売会

- (1) ねらい 小学生や幼児、地域住民との交流を通し、コミュニケーションスキルを育むとともに、成就感や収穫の喜びを共感することで、農業に対する理解を深める。生産物販売を通して、コミュニケーションスキルを向上させる。
- (2) 対象 全学年
- (3) 内容 小学生との交流学習（播種・田植え・収穫等）、  
こども園との交流学習（花壇造成）  
アンテナショップ「遠農高マルシェ」販売会
- (4) 成果 子供たちに作業を教え、サポートすることで、充実感や自己有用感を育てることができた。  
地域の人と触れ合うことで、コミュニケーションスキルを活かす機会を多く持つことができた。



## 5 次年度に向けて

### 1 成果

- (1) 学校環境適応調査「アセス」の結果の変化  
「アセス」の結果 2 回目で「対人的適応（友人サポート・向社会的スキル）」が、やや増加した。
- (2) 子ども理解支援ツール「ほっと」により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況  
1 学年は、全般的にコミュニケーションスキルが低く、「緊張」の度合いが高い。また、学年が上がるにつれて、コミュニケーションスキルが向上している。
- (3) 生徒の変容した姿  
異年齢交流や販売会などの活動経験を重ねることで、2・3年生のコミュニケーションスキルや自己肯定感が向上した。  
教職員による教育相談やスクールカウンセラーの個別カウンセリングの充実によって、生徒が相談しやすい環境となった。また、生徒の自己理解が深まり、自分の課題に対して前向きに取り組めるようになった。

### 2 課題

- (1) 早い時期から構成的グループエンカウンターを行うなど、クラスを基盤とした人間関係作りの取組を充実し、コミュニケーションスキルの向上に努める必要がある。
- (2) 子ども理解支援ツール「ほっと」で明らかになった課題について、学校教育活動全般における指導の中で、意識的な取組を行う必要がある。

### 3 次年度に向けて

- (1) 構成的グループエンカウンターを計画的・継続的に実施する。
- (2) 学校環境適応調査「アセス」及び子ども理解支援ツール「ほっと」の結果について、教職員間で情報を共有化し、支援体制を確立すると共に、日常の学校生活の中で継続的な声かけをするなど、教員サポートの充実に努める。
- (3) 教員のスキルアップのため、校内研修会を継続して実施する。